

京都大学	博士（文学）	氏名	LEE HANSOL
論文題目	Opportunities or Barriers? Fields of Study and Gender Disparity in the Japanese Labor Market （専攻選択と日本の労働市場におけるジェンダー格差研究）		
（論文内容の要旨） 本論文の目的は、専攻選択が女性雇用やジェンダー格差とどのような関係にあるかを日本の文脈で検討することである。第一章では高等教育への機会拡大を背景に、女性雇用の変化を考察した。日本では高等教育を受ける機会のジェンダー格差が縮小してきたものの、諸先進国で見られる女性雇用と教育との正の相関関係が見られないとされてきた。しかし近年、晩婚化・未婚化や女性雇用促進を図る政策の導入といった社会的変化が生じており、女性雇用と教育との関係を改めて考察する必要があると主張した。一方、女性の経済活動の重要性が高まる中、女性雇用の現状を理解するには高等教育段階での教育への投資、すなわち専攻選択に注目する必要があると述べた。したがって、不安定労働や雇用状態、職業的達成といった労働市場のアウトカムにおけるジェンダー格差の仕組みを、日本の高学歴女性の専攻選択に焦点を当てて明らかにすることを本研究の課題とした。 第2章では、専攻選択間の労働市場格差を説明する諸メカニズムを検討するために文献レビューを行った。人的資本論、シグナリング論、セルフセレクション論、社会的閉鎖論を検討した後、欧米社会と比べて日本で専攻選択への関心が少なかった理由を説明した。日本では雇用が比較的安定しており、失業率が低かったため、専攻分野の重要性が強調されなかった可能性を示した。また、日本では企業単位で行われる訓練システムが確立しているため、専攻選択が職業スキル形成に役立つことが否定されてきた可能性も論じた。さらに、日本でも専攻選択によって労働市場から得られるリターンが異なることを、先行研究をもとに指摘した。そして日本の労働市場研究において専攻選択が有用な情報を与えると主張し、大卒者を文化特定の専攻と職業特定の専攻出身者に分類することを提案した。 人文系は職業的志向が不足しているため労働市場で不利になりやすいという主張に基づき、第3章では、日本と韓国の女性の高い非正規雇用率が彼女らの専攻選択、特に人文系への集中によって説明されると仮定し、日韓の大卒者の初職を中心に検証した。分析には、日本の社会階層と社会移動全国調査（以下SSM調査）の2005年と2015年のデータ、韓国労働パネル調査の1998年から2021年までのデータを用いた。第3章から得られた知見は以下の通りである。日本女性は人文系に集中しているが、韓国女性はそうでない。また、			

日本では韓国より性別専攻分離（男女で異なる専攻を選ぶ）の程度が著しい。教育系は職業特定の専攻であるものの、非正規雇用リスクに関しては日韓両国において人文系とほぼ同じである。性別専攻分離は日本の非正規雇用におけるジェンダー格差を説明できるが、韓国のジェンダー格差は専攻選択によりほとんど説明されない。

第4章では、キャリアと家族生活を同時に維持するために女性は専攻選択から得た知識を男性より積極的に活用するという比較政治経済論の仮説を2015年SSM調査のデータをもって検証した。キャリア形成のため、女性は各企業に特有のスキルより持ち運び可能な一般スキルを好むという理論を考慮し、第4章では一般スキルを取得できる専攻選択に注目した。日本で男性は家族生活と仕事を両立しやすい一方、女性はそうでないという主張を踏まえ、専攻選択で得られる一般スキルが女性の雇用確率、労働市場再参入、労働市場からの退出にどう関係しているかを検討した。その結果、一般スキルを与える専攻は女性の雇用確率を高め、かつその関係は母親であるかどうかには依存しないことがわかった。しかし、媒介分析の結果、専攻から得られた一般スキルは雇用確率におけるジェンダー格差を縮小しなかった。さらに、理工系、医薬系は女性の労働市場再参入と正の関係にあり、社会科学、理工系は女性の労働市場からの退出と負の関係にあることが分かった。

第5章では、理工系出身の女性が非理工系出身の男性と比べていかに職業的達成を遂げているかを明らかにするため、2015年のSSM調査データを用いてガラスの天井説を検証した。女性にとって理工系の仕事はジェンダー規範と合致していないため、理工系出身の女性はそういった仕事から自ら脱落しやすい。したがって、理工系学位と労働市場のリターンは正の関係にあるものの、管理職のような特に高い地位に就くのが難しいという仮説を提示した。その結果、職業的達成を基準に上位20%を占めている者の中で、理工系はさらに高い職業的達成を遂げられることが分かった。職業的達成の上位20%で女性は男性より不利になる可能性があるが、理工系女性の不利は確認できず、ガラスの天井説は支持されなかった。

第3、4、5章の実証分析結果をレビューした上で、第6章では、女性雇用を理解するにあたって彼女らの専攻選択を考慮することが非常に重要であると結論付けた。日本で見られないとされてきた教育資源と女性雇用の相関関係は、実は研究者が注目した時期が異なっていることに起因すると説明した。すなわち、女性の雇用と彼女らの教育資源との関係に対する最新の研究が少なかったことによって、新しい知見を得られる機会が見逃された可能性があると主張した。最後に、各実証研究における限界を指摘し、政策的示唆および今後の課題を示した。

（論文審査の結果の要旨）

この論文は大学、短大、高専等（以下、大学）を卒業した女性の卒業後の収入や従業状態、社会的地位が、学生時代に専攻した学問分野とどのように関係しているのか、研究したものである。男女の平均賃金格差や平均的な社会的地位の格差は多くの国々で縮小しているものの、依然として存在している。特に日本はこれらの格差が大きいことで知られている。このような格差の一因として、男女の平均教育水準の格差が指摘されてきた。確にかつては女性のほうが大学進学率が低く、そのことが女性の平均賃金を押し下げてきたが、近年では男女の大学進学率の格差がかなり縮小したのに対して、日本では賃金格差の縮小は遅々として進まないことが再三指摘されている。その原因の一つとして指摘されているのが、性別専攻分離（男女で専攻分野が異なる状態）である。女性は就業の継続や賃金アップにつながりにくい学問分野を専攻しやすいことが、平均収入の低さ、離職率の高さ、平均的な社会的地位の低さにつながっているのではないか、という可能性があるのである。

こういった可能性はずいぶん前から知られていたが、かつては大卒者の全人口に占める比率が低かったこともあり、学生時代の専攻分野に関する大規模な調査がなされてこなかった。近年、専攻分野とその後のスキルの発展が研究者のあいだで注目され、データの蓄積が進んでいる。これらを使い、日本でも賃金と専攻分野の関係については一定の研究成果が出ているが、専攻分野と非正規雇用率、離職率、再就職率、そして平均的な社会的地位の関係については十分に研究されていなかった。そこでこの論文では、これらの関係について明らかにするとともに、それらが女性の就業率の低さや非正規雇用率の高さ、社会的地位の低さとどう関係しているのか検討したものである。

日本では女性は、人文、教育・芸術、医療といった分野を専攻しやすく、理工、社会科学を専攻しにくい。さらに大卒直後に就いた仕事为非正規雇用かどうかを調べると、人文学、教育学で非正規雇用率が高い。すなわち、日本で女性の非正規雇用率が高いことの原因の一つは、安定した仕事とのつながりが比較的弱い学問分野を女性が専攻しやすいことにありと考えられる。比較の対象として韓国についても同様の分析がなされているが、韓国では日本よりも性別専攻分離が弱く、専攻分野による非正規雇用率の違いも小さいので、韓国での女性の非正規雇用率の高さは専攻分野とは関係ないことが示されている。

さらに日本における就職後の大卒女性の就業率を見ると、人文系出身の女性は就業率が低く、他の分野のあいだではあまり差がない。ただ、離職率と再就職率を見ると、社会科学系のように離職率が低いせいで就業率が高い分野と、医療系のように辞めても再就職する率が高いせいで就業率が高い分野があり、キャリアパターンの違いが見られる。このような違いは大学で身につけたスキルの違いによる影響を示唆しているが、因果関係については、いくつかの可能性が考えられる。例えば、もともと

就業する志向の強い女性が理工系や医療系の学部に進学するのもかもしれないし、女性の就業志向に学問分野による違いはないが、理工系や医療系のほうが女性が就業しやすいスキルを提供しているということかもしれない。このような因果関係の解明は今後の課題とされている。

最後に社会経済的地位指標を用いて、学問分野による女性の社会的地位の差が検討されている。社会経済的地位指標とは、職種から一般の人がイメージする地位の高さの平均値をもとに計算されたものであり、専門性や収入の高い職業ほど地位が高いとイメージされやすい。年齢や就業年数の効果を統制すると、平均的には、医療系出身者が最も社会的地位が高く、教育系、理工系が続き、その次が人文系、最も低いのが社会科学系である。この傾向は男女で有意な違いがない。女性の社会的地位に関しては「ガラスの天井」という比喻を用いて、ある水準以上の地位に就くことが難しいと指摘されてきたので、その可能性も検討されている。しかし、女性の不利はあらゆる水準で確認され、特に高い地位に就く際に不利になることはなかったし、特定の学問分野を専攻することでガラスの天井を突き破りやすくなるということも確認できなかった。

先行研究では医療系の平均収入が他の分野よりも高く、他の分野の平均賃金の差はあまりないことが指摘されているので、それらと考えると、医療系出身女性の生涯賃金が最も高く、人文系出身の生涯賃金が最も低いと推測されるが、生活の質や豊かさは、本人の収入だけでなく、配偶者などの生計を共にする者の収入や人間関係など、その他諸々の要因によっても大きく左右されるため、結果の解釈には慎重になるべきである。

以上のように、この論文は優れた研究成果であると考えられるが、問題がないわけではない。すでに述べたように、どのような因果的メカニズムで専攻分野による女性のキャリアパターンの違いが生じているのか、十分に解明できているとは言い難い。また、データの規模が十分ではないため、専攻分野の分類が大まかにしかできていない。この論文では社会経済的地位指標を用いた分析がなされたが、「ガラスの天井」は女性が管理職に昇進しにくいことを表す言葉なので、管理職への昇進率を分析したほうがよかったのかもしれない。さらにいえば、こういった専攻分野と就業の関係は時代によって変化していると考えられるが、やはりデータの規模が不十分なため、そこまでは検討できていない。とはいえ、これらの問題は軽微なものであり、今後の研究の進展によって解消されるものと考えられる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2025年1月24日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。